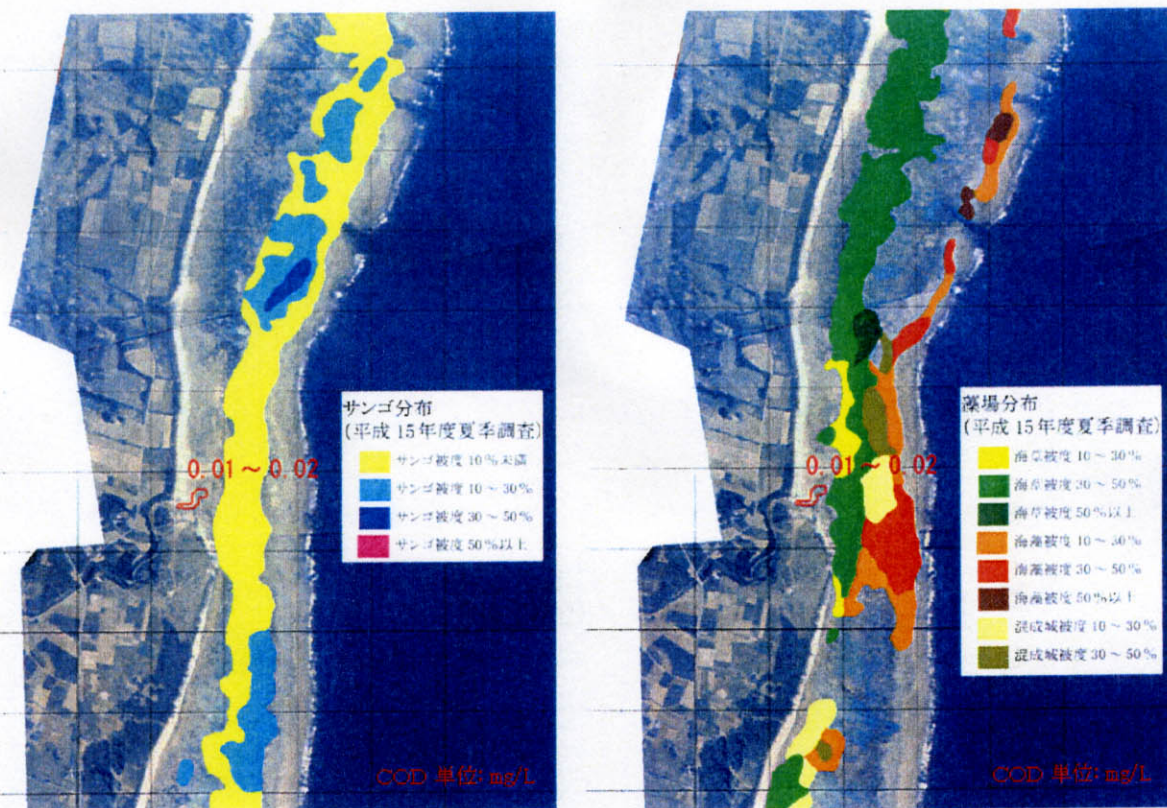


供用時におけるCODの拡散範囲とサンゴ、藻場分布をそれぞれ重ね合わせた（図-6.12.2(8)）。供用時におけるCODの現況からの変化は最高で0.02mg/Lである。

CODの拡散範囲付近には、被度10%未満のサンゴが分布するものの、サンゴ類の生息環境や分布状況に変化を与えるものではなく、サンゴ礁の生息環境や分布状況の変化はないものと予測される。

また、COD濃度の拡散範囲付近は、海藻が繁茂する礁池中央部やリーフエッジまで及ばないものの、海草が被度10～50%で分布する。本州に分布するアマモの生育している場所でのCOD濃度の実測値は年平均2.3mg/L以下^{註)}であることが知られており、飛行場の施設の供用におけるCOD濃度の変化はこの値よりも小さい。また、現況でも海草は栄養塩物質の高い場所、低い場所においてその被度に変化はないことから、飛行場の施設の供用に伴い海域に負荷されるCODによる海草藻場の分布状況の変化はないものと予測される。



サンゴ分布とCODの最大拡散範囲

藻場分布とCOD最大拡散範囲

図-6.12.2(8) 供用時の環境の変化による生態系への影響

注。「港湾構造物と海藻草類の共生マニュアル」（平成10年10月、(財)港湾空間高度化センター）